

東大闘争の中から

安田講堂攻防戦はテレビ電波にのり、高い視聴率を稼いだ。それは、電波にのせる人もみる人も、この昭和元禄の一風俗と理解し、隔絶された「小世界」のアクションと考えれば、容易に楽しむことができたと言つていい。それまで、他人のうかがいしれぬ「学問の殿堂」なる言葉でかざられ、聖域として基本的人権以上の「学問研究の自由」を世間に要求していた……この大学を考えてみれば、「ざまあみろ」という言葉の一つもできそうである。

大学は犯すべからざる「聖なる空間」であるという幻影と、しかしながら大学の生みだした出世のはやい管理者達の与えるイメージと、要するに、東大へのうらみ、つらみが一斉にでてきたものといえる。世間は、学生の「破壊活動」にまゆをひそめ、「迷惑」を感じ、「受験生」の身になつて事態を憂え、良識ある市民納税者としてふるまっていた。しかし、荒廃した聖域を樂しげに見守る視線は、市民としての立場のうらにかくされた本意を物語っている。

1

「こんな大学は、こわしてしまえ」
きりはなされた「世界」にたてこもり、世間の非難をあげ、孤立していたのは全共闘であった。そのスローガン「帝大解体」は、それなりに、多くの理解者をもっている。他方、世間の非難に同調し「東大を守れ」というスローガンをかけ、多数派として実力を振るつた民青系の諸君。彼らは、世間の気ままな無責任ぶりを非難できるだろうか。「東大を守れ」とは、沢山の説明を問にしなければ、とても理解できないものとなつている。一見、東大の特権を横柄に世間に要求しているにすぎないのだから……。

闘争は、この一年の過程で多くのことを語りつづけてきたが、それは、世間にとってどうでもよ

いことのもうでもあった。それは、世間が第三者¹の立場で、あたかも、政府、文部省のようにふるまっていることにしめされるだろう。そして、機動隊は、この第三者の立場から、警棒をふりあげて学生を追いまわす。

きり話された「世界」それは実のところ街頭でくり返されてきた「世界」であった。学生にとつてみれば、そこで教育され、そこで成人式をあげた空間にすぎなかつたのである。佐世保、羽田、王子、三里塚等々、そこで主張された行動は、蓄積されたものとして根をはやしていた。世間は、学生に「甘えるな」といった。しかし、この言葉は、世間に投げかえされる時がくるだろう。「甘えているのはどちらだ」

2

闘争の一年の経過は、多くのことを語つた。潜行する山本議長の言うように「東大全共闘は全てを問うた」とでも表現できる。

その発端は医学部の闘争として、孤立した闘いであつた。学生の基本権にかかわる処分制度をめぐつて、或は自治組織の承認をめぐつて、中小企業の闘争のような観を呈していた。医学部の特殊な医師養成制度は、無給医としての隷属を学生に、手配師としての特権を教授に与えていた。それが、閉鎖された労働市場における問題である限り、青年医師連合の結成から団交要求へと、徒弟組合……クラフトユニオンの形成が展望された。労使慣行に習熟しない親方のろうばいは、そこが教育の場であることによつて混乱を増すばかりとなつた。「疑わしきは処分せず。これは世間の常識であつても、この医学部のものではない。」医学部長のこの言明は、闘争の舞台を全学にひろげてゆく。徒弟・研究者としての基本権よりは、学生一般としての無権利状態が大きくキローズアツプされてきた。

大学の機構は無責任の体系と呼ばれるが、医学部教授会の独断専行を阻止する上部組織をもちえなかつた。他学部の口出しをさせない「学部自治」は、その学部内にあつても、他学科、他講座、他の教授の責任範囲に口をだすことを許さない組織構成となる。いわゆるタコツボの連合体である。これは形式上、教授会―評議会―総長という責任の移譲という形をとっているのであるから、タコツボの構成原理と上部責任を統合するためには、全員一致、一枚岩の保障がなければならぬ。民主集中性、少数は多数に従い、下級は上級に服する。“実質上の責任は、医学部にあるに、かわらず、形式上の責任は総長が負わざるを得ない。そして全ては全員一致により他学部の末端教官まで責任を感じざるを得なくなるしくみとなる。誰が責任をとり、決断するか―誰かが一人決断してひきずれば、以後すべては、誰かの責任でもあり、誰の責任でもなくなる。

医学部の闘争は、逃げまわる医学部長から総長の追及にかわつていく。どこかの高校の校長のように、式だけは立派にすませたいという総長がいるかぎり、彼は卒業式、入学式はでてこざるをえない。そして、本部占拠、封鎖へと戦術は拡大し、機動隊導入、暴力排除という強行策は全学に無期限ストの波及を呼んでいった。機動隊導入は逃げまわる総長にくわえ「理性の府」としての幻想をたたきこわすにひとしいものであつた。大学の幻想に向けての闘争は開始されたのである。本部封鎖は大学の機構を麻痺させなかつた。教授会は学生問題に没入しても、日常の業務は平常の状態を保っている。大学が官僚機構の一端であるかぎり、ぼう大な組織のごく細小の部分に、闘争はそのほこ先をむけているかのようであつた。しかし、実際の権限はともあれ、形式上の責任管理はすべて教授会―評議会が負っている。「大学の自治」の名において教官は憲法に保障されている以上

の権利を認められているかのようであり、要するに低賃金の代償に教育者、学者、管理者としての面子が与えられていた。これを幻想と呼ぼう。事實上、彼らの支配権は自己のタコツボの権益に限られ、支配のメカニズムは文部官僚のほしいままにされていたと言つてよい。無責任の体系故に、官僚機構の網の目は、教授会をその表面にして、機能しつづけていたと言えよう。行政権力がその独裁権をふるい、自己の論理にしたがつて人の手からはなれて運動はしていても、それを保障するのは、「良識」であり「理性」であり「民主制」であり、その制度としての議会である。大学はこれを教授会と呼ぶ。たまたま議会とは異なり形式的平等の一票を学生諸君に与えていないというきずものであつた。しかし、機構の外皮は、東大にあつては別の様相を呈していた。形式的支配権のきゅうくつきは東大の肩書きの効用を逆用し、それを埋めあわせてゆく。官界から財界から金は流れる。タコツボは幻想のものではなくなる。世に言う産学共同、官学共同路線である。

大学が権力の機構から自律していると言う幻想。「大学の自治」それはまさに「東大の自治」にうらづけられたものである。東大教授の肩がきが金になること、幻想は、東大にとっては実体を伴っていた。

機構の外皮のきずをなおす、これを合理化、近代化路線と呼ぶ。この路線を権力者は志向するが、末端のタコツボは自己の権益を侵害するものとして警戒したのである。一切が現状維持。これが大学の幻想の帰結であつた。

学生諸君の要求は七項目にまとめられている。これはきずものの衣裳の改良を要求したのである。ただ、民青の諸君が自らも近代化の手伝いをしたいという「学生の参加」を掲げたのと異なり、大衆団交を要求して無責任体系の切断を訴つていった。大衆団交は直接民主主義としての自己

の組織原理であつて、その場における取引きと妥協は不可能であつた。この戦術は七項目要求が偶然にも、法、文、医の東大を支える有力学部的面子を一一つつづ構成をとつていたことと相乗作用し、当局の硬直した反応を呼んだのである。改良の要求が、それを処理しきれぬ機構を相手とした時、そこには当然のように飛躍が生まれて来る。

本部封鎖—安田講堂占拠は、支配の中核へのくさびを打ち込むはずであつたが、大学の機構は軟体動物の様に正常にうごいていた。

東大闘争は、実体化された幻想の支配者とその裏側にあやつりの糸をにぎる権力の機構と、その二つにむかつたはずである。だが他の大学と異なり、東大闘争がつきあたる壁は、むいても、むいてもというラッキョウのような機構であつて、最高の面子をかける教授会に最初から最後までつきあわざるを得なかつたのである。戦術としてのバリケードは、当局の対応から、必然、自己の間を維持する思想を生きだしてゆく。二重権力“「コミュニケーション」等々・・・それは自律する思想の拠点に変化していく。学生の基本権の要求から「東大解体」への飛躍は、戦術を媒介として生みだされたものであつて、要求の論理的必然とはいきれなかつたのである。戦術は、決して戦略であるとか、目標であるとか、理念であるとか、切りはなされているものではなかつた。要求にみあう戦術を“…つねにこれを主張した民青の諸君は、「戦術が要求を規定する」という逆の真理を知っている政党指導部によく似ていた。だが考えてもみたまえ、ダラ幹は、大きな目標に最低の戦術をたてるが、小さな目標に強固な戦術をとつたためしがない。既成指導部は、統制力を言葉によつて維持しているが民青諸君は実力によつてしか対応できなかったのである。戦術論争がくりかえされたあげく、運動の過程が「東大解体」

への飛躍をみちびこうとした時、民青諸君はそれ³に暴力的に応じた。生みだされた衝突と混乱は、「東大解体」が自己の利益まで失うという学生の特権意識を呼びさまし、ここに「一般学生」の登場となつた。「ファシスト」は闘争者に暴力をふるうことによつて、大衆を政治の部隊にひきずりだした。民青諸君は、私学体育会の役割をひき受けたのである。新執行部加藤代行の決断は、この「一般学生」に呼びかけ、機構に身をゆだね、専門バカをきめこむ一般教官の再組織におかれていた。当局はいつのまにか、民青対全共闘の間に入る第三者の立場に、身をさけたのである。加藤代行が、自由な身として動けたのは、それだけでなく、加藤Ⅱ坂田のコンビによつて、文部官僚の一切の機構をとびこえて、臨戦体制をしいたことによつて保障された。反共イデオロギーにぬりかためられた執行部は、加藤Ⅱ坂田コンビを自民党にみとめさせたのである。

学内政治は、「一般学生」の操作にむけられる。民青と中間派の妥協工作に、当局は師弟関係を使つて介入し、恰も人生相談を引受けるかのように、民青色の一切をとりのぞいた「統一戦線」をつくりだした。民青は、独自のスローガンをもおろし、ただ、全共闘に敵対する学内機動隊に変じたのである。反共故に民青を利用しえたのが当局であるとすれば、民青も又中間派だきこみとその利用を策して成功したかのように考えた。「入試中止」Ⅱ「東大閉鎖」の脅かしは政府からの側面援助の形をとり、そして妥協・収拾になだれをうつつ入りこんでゆく。全共闘は、政治技術の下手さ故に孤立したのであるうか、「東大解体」のスローガンを守るために孤立したのであるうか。民青への突撃をくりかえし、民青は昼は「一般学生」をたてに使い、夜は全都の組織を挙げて安田講堂をおびやかす。ノンセクト・ラジカルの共闘派ゲバルト部隊は、そこに登場していた。闘争の一切がエ

ゴイズムとセクトの組織利益に裏切られていく過程。闘争は、孤立してもたかうノンセクトの台頭をもたらしたのである。何となれば彼らには失う物が無い、ノ連帯を求めて孤立を恐れず”

多数派を結集した当局は、機動隊導入にふみきつた。一切が東大を守るために行われたことである。少数者の圧殺は、民主主義の帰結であることを示して……誰が誰を利用したか。学内政治をひとたび政治一般の部隊につれもどした時、大学の中に勝ちを誇るべき者はいなかった。自民党は入試中止を迫り、加藤ノ坂田の約束を、ほごにした。そして民青へのけんせいを試みる。民青の成果「確認書」は、民青が解釈できぬものとしての枠をはめられたのである。当局は民青を利用した。当局は政府に利用された。政策の唯一の重点は、20年安保、その拠点の撃破でしかなかったのだ。

東大闘争は次のことを示した。未だかつてなかった大衆的反乱の規模は、幻想にむかって進撃する。国家の幻想にむけて、それは自らの幻想を打ちこわすことでもあった。大学の幻想は、国家の幻想の一部をなしていたが、闘争の進展は、国家権力を第三者として登場させてしまった。闘争に対する第三者の立場は、国家主権にあずかっているという納税者の立場であり、彼らは機動隊の主人公のような錯覚を消してはいない。要するに、全共闘を孤立させた学生は、自らを一人前の大人のようにふるまった。民青から右翼まで、様々な政治学生が登場し、大学当局を牛耳る政治好きの学者と腕を競いあったのである。

闘争は、大学の幻想をたたきこわし、国家権力にむけての飛躍の途上に挫折したかにみえる。東大全共闘は、その意味で、きりはなされた世界にいたのだ。しかし、对国家への闘争は、その中断の中にあつて、全国の学園闘争の口火をきる。安田攻防戦は、全国の学園闘争の口火をきる。教育

の場は、高校を含めて、動乱の場にかわりつつある。一切の教師は、その無能故に、孤立したノ権力の手先ノ東大全共闘の孤立は、ノ造反”の合図となった。

3

「時代閉塞」を告発し、大正の思想的動乱を予告したのは、明治末の一詩人であった。安保闘争以後思想の自立を求めて戦後思想をなでぎりにしていたのも一詩人であった。今、学生諸君は丸山真男を追及し、吉本隆明を復習している。「反体制」と「進歩的」の一切は、追及の標的にさらされている。「大学の自治」「学問の自由」、それを支える「反体制」の理念は、戦時体験を集約し、権力に対する被害妄想を、権力からの自立と錯覚していたにすぎなかった。しかしその戦後民主主義は、単に大学の理念ではなく、東大に巢食う日教組の御用学者によつて全国にばらまかれ、復古思想の影を求めて進歩ぶる戦後教育の理念となつていたのである。昭和30年代の高度成長は、「反動」と「進歩」の対立がいかにむなしものであるかを実証した。戦後の進歩性が、その現実的な基盤を失い、宙に浮き、「大学に入るまではがまんせよ」「社会に出てから一人前の口をきけ」という、高校の教師、大学の教官の人生訓話にかわつた。それは青年の教育体験と社会体験によつて教育者の自己ギマンであることが明らかにされつつある。他ならぬ彼らこそが、成長を支えていた「労働力」ではなかったのか、……又、大学は、理工系の肥大、マンモス化、人文社会科学系の萎縮とか30年代の高度成長のアンバランスを如実に示していた。自民党にのみ「アカだ」と言われる学者は、戦時の先輩の学問的結晶を切り売りして、この世の春をうたつていたのである。

共産党も又、これらの先生を大切にした。党员は、タコツボを赤く染めるのを革命の基本的路線

と考えていたのである。自民党から共産党まで、

一切の既成政党はその御用学者を東大にかかえ、彼らは大学において平和共存をきめこみ、その裏で、人事となわぼりの確保に暗躍しつづけていたのである。東大全共闘は造反を開始した。その造反が必然であったのは、50年代の資本主義の合理化の過程にそぐわぬものとして、世のいう「東大の封建性」が如実に示されていたからである。だが、東大が「封建的」であるというなら、社会党や、共産党はどうであろうか。

全共闘の斬新さは、東大の「合理化」の一切を拒んだところにある。造反は改良ではない。……東大解体とは、教授会の解体であり、一切の特権を東大からはく奪せんとする試みであり、批判である。それは自らの特権をも否定するが故に、「造反有理」となる。全共闘がその議論を展開したとするなら、それが最初の試みとして孤立化するのも必然であった。一切の政党が反対し、共産党は公然と暴力をふるい、いまなお、建物の専有を主張し、官憲の弾圧がきびしくないと、わめきちらす。その手先である東大職員組合執行部は、日教組大学部とともに、東大全共闘非難の声明を日教組見解とさせ、この声明を下じきに、総評の声明ができあがった。

東大闘争で、失うものが大きすぎたのだ……既成の一切の組織は……。孤立の必然を、全共闘の戦術のまずさに求めるものは、現社会の一切の組織の相互補完とそのメカニズムの巨大な体系化を直視すべきである。「封建的」と呼ばれるものの実体を見よう。それは大学の「封建性」を一部とする、政治的上部構造の全体であった。この巨大な体系は、たえずくりかえして反逆を生み出すであろう。彼らの戦術を批判するものは、その無力を共産党によって非難されている。共産党は暴力によってのみ彼らを圧殺しうるものとして、公安警察と同等の政治的リアリズムを主張して

いるのだ。

造反が「文化大革命」とならないのは、権力との対決が、政治的上部構造全体への対決にすりかえられてしまう観念性の故に、であった。

革命、権力の奪取は、今、模索されはじめている。それを模索しているのは、「大衆」であることを、東大全共闘は示していた。自称前衛の組織保存本能を超えて、ノンセクトは失うもの的一切がないことを自覚しはじめている。

きりはなされた世界で、全共闘は「展望」を語らない。「展望は如何」という問の裏に、「労働者には、わけがわからないじゃないか」という反問を読み取っているからだ。「科学」のいう「プロレタリアート」への一切の不信が、造反の根柢となつていることを主張せんがためだ。労働者階級への連帯は言葉で表示することはできぬ。きりはなされた世界の沈黙は、生活するものへの期待を表現し、石器時代の陽気さを想わせる行動は、「反乱」が生活する「大衆」のものであることを表現している。東大全共闘は、ジメジメした「前衛」とは無縁な存在であった。そして、自己の行動を言葉によって弁解しない。

(一研究者からの寄稿)

(「溶鉱炉下の叫び」第5号 鋼管川鉄青年活動者会議 一九六九年四月一日)